

2014年1月23日／浪宏友ビジネス縁起観塾

実践の尊さ

資料：庭野日敬著『法華三部経 各品のあらましと要点』（佼成出版社）

1. 菩薩は衆生の手本（庭野日敬著『法華三部経 各品のあらましと要点』p. 199～200）

(1) 理解から実践へ

これまでの説法で、〈真理〉はよくわかりました。いよいよこれから、その〈実践〉にうつらなければなりません。

(2) 見当がつかない

ところが、高遠な真理を日常生活の行為のうえにどう生かせばいいのか、凡夫にとってはなかなか見当がつきません。

(3) 菩薩を見習う

その問題を解決するには、完全円満な〈仏〉の境地の一步手前にあって、ある一つの美しい徳、あるひとつの尊い行為を代表する〈菩薩〉を見習うのが、まずもって順当な道だといわなければならないのです。

(4) それで、この品（薬王菩薩本事品）以降の説法には、主としてそれが述べられているのです。衆生に、より身近な手本を示すことによって、発奮をうながされるわけです。

2. 手本について

(1) 手本

手本にするとは、具体的なすぐれた姿に接して、姿かたち、行為、徳分などのイメージを心に焼き付けて、自分の修業目標とし、これに向かってたゆまず努力することです。

(2) 「自分本位の生きかた」から「高遠な真理の生きかた」へ

今まで、貪欲・瞋恚・愚痴に満ちた自分本位の人生を送ってきた人が、高遠な真理が示す生きかたを学んでその通りだと思い、そのように生きたいと願ったとします。

しかし、具体的にどうすればいいのか分かりません。分かったとしても、真理の通りにはなかなか行動できません。どうしても、自分本位の行動が現われてしまいます。この困難を乗り越えなければ、高遠な真理に沿った生きかたは実現できません。

そこで、すぐれた菩薩を手本として修業することが勧められているわけです。

(3) 仏教の根本テーマは人間関係です。菩薩は美しい徳、尊い行為によって、すぐれた人間関係を作り育てます。これを手本として、よりよい人間関係を作り育てることのできる徳や行為を身につけることを、修業者に勧められているのです。

4. 薬王菩薩本事品の概要

- (1) 宿王華菩薩が薬王菩薩について問い、釈迦牟尼世尊がこれにこたえて、薬王菩薩の前世の事績を語ります。
- (2) 薬王菩薩の故事にことよせて、身を捨てて教えを実践する尊さを説きます。
- (3) 妙法蓮華経の教えの素晴らしさを十の譬諭で説きます。（「【参考】十喻称歎」参照）
- (4) 妙法蓮華経の利益(りやく)を十二の譬諭で表わします。（「【参考】十二喻の利益」参照）
- (5) 教えを実践する人々が受ける功德を説きます。
- (6) 末法の時代に教えを広宣流布するように勧めます。

5. 薬王菩薩の故事（庭野日敬著『法華三部経 各品のあらましと要点』p. 200~202）

(1) 一切衆生意見菩薩の修行

薬王菩薩の前世は一切衆生意見菩薩(いっさいしゅじょうきけんぼさつ)という菩薩で、日月浄明徳如来(にちがつじょうみょうとくによらい)という仏さまにつかえて法華経の教えを聞き、ひじょうに長い年月のあいだ修行した結果高い境地にたっすることができました。

(2) わが身を燃やして供養する

そこで、日月浄明徳如来と法華経の教えを供養(帰依と感謝のまごころをあらわす行為)したいとおもい、神力をもって天から花や香(こう)を降らせて供養したのですが、しかし、そういうことよりも、身をもってする供養がよりたいせつだと考え、さまざまな香油を飲み、身に塗ったうえで、自分のからだに火をつけて燃やしました。その火は千二百歳(さい)のあいだ燃えつづけ、その光は世界中を照らし出しました。

(3) 国王の子に生まれ変わる

一切衆生意見菩薩はこの供養をなしおわって、寿命がすぎたのですが、その後また日月浄明徳如来の国土に、国王の子として生まれ変わりました。そして、生まれるとすぐ如来を礼拝しにまいました。

(3) 日月浄明徳如来の入滅

すると、如来は、「わたしは今夜半に入滅しますが、これからさき仏法を世にひろめていくことを、そなたに頼みます」とおおせられ、そのとおりに入滅してしまわれました。

(4) 両腕を燃やして供養する

一切衆生意見菩薩は、泣く泣く仏身を火葬にし、その仏舍利を八万四千の瓶(かめ)におさめて国じゅうにまつり、それぞれりっぱな塔を建てて供養しました。それでも供養が足りないと思った菩薩は、偉大な福德に輝く自分の両腕に火をつけて燃やしました。その光明に照らされて、おおくの人が尊い発心をしたのですが、七万二千歳たってそれが燃えつき、菩薩の両腕がなくなったのを見て、人びとは自分たちのだいじな導師の姿を嘆き悲しみました。

(5) 両の腕がもとに戻る

それを見た菩薩は、「わたしは両の腕は捨てたけれども、そのかわりに永遠不滅の身を得ることができたと信じています」といいました。その瞬間に、たちまち両の腕はもとどおりになってしまいました。

6. この物語で教えられている要旨 (庭野日敬著『法華三部経 各品のあらましと要点』p. 202)

- ・人間にとって自己犠牲(じこぎせい)ほど高貴な精神はない。
- ・実践こそが教えに対する最高の供養である。

7. 「人間にとって自己犠牲ほど高貴な精神はない」について

(1) 自己犠牲

自己犠牲とは、価値ある目的を達成するために、心身の苦痛や社会的な不利益に耐えて行動することです。

(2) 「両の腕がもとに戻る」について

- ① 一切衆生憐見菩薩は両腕を燃やして仏を供養しました。釈迦牟尼世尊はこの行為を讃え、修業する人々に手本にするようにと勧めています。
- ③ 両腕を燃やすような厳しい実践は、現象にとらわれた人びとから見れば苦痛であると思いますが、真理に徹している菩薩にとっては、苦痛でもなんでもないので。自分・他人・世間のための価値の高い利益(りやく)に向かって、真理の実践をしているからです。このことを「両の腕がもとに戻る」と言っているのです。

8. 「実践こそが教えに対する最高の供養である」について

(1) 供養とは

- ① 供養というのは、仏に対する感謝の心を表わす行ないです。心に感謝が起これば、それは必ず行ないに表われるもので、行ないに表われない感謝はまだほんものとはいえません。(庭野日敬著『法華経の新しい解釈』p. 40)
- ② 仏さまに対する供養には三つあるとされています。
 - 利供養(りくよう) = 仏さまにお花をあげたり、お供物を具えたりする
 - 敬供養(きょうくよう) = 仏さまを礼拝したり、讃嘆したりする
 - 行供養(ぎょうくよう) = 仏さまの教えを実践する

(2) 行供養

仏さまから教えていただいた教えをその通りに実践するのが、行供養です。仏さまと、仏さまの教えに対する感謝の心を、具体的な行ないとして表わしているのです。

9. 教えを実践する功德

薬王菩薩本事品の教え（妙法蓮華経の教えにはかなりません）を、釈迦牟尼世尊が説いた通りに実践する人が受ける功德が、いろいろと説かれています。

なかでも、日常的で重要なものは次の一節でしょう。現代語訳でご紹介します。

「また、この経典を受持するものは、貪欲に悩まされることはないであります。また、怒りや愚かさゆえに苦しむこともありますまい。また、おごりたかぶる心や、ねたみうらむ心など、さまざまに迷いに身を苦しめることもないでしょう」（庭野日敬著『新釈法華三部経 8』p.310）

10. 功德を得られない人

(1) 行供養が困難な人

次のような人々には、行供養は困難であり、功德を得ることができません。

- ・教えが目の前にあっても、学ばない人
- ・教えを学んでも、実行しない人
- ・教えを学び他の人に伝えるけれども、自分では実行しない人
- ・教えを実行しようと思っても、実行できない人
- ・教えを学び実行しても、途中で止めてしまう人

(2) 自己犠牲を払えない性質

貪欲の強い人、怒りっぽい人、不平不満の多い人、慢心の強い人などは、自己犠牲を払えず、功德を得ることができません。

(3) 筧（ざる）のような実践

人さまのために何かをしながら、謝礼を求めたり、相手を見下したり、威張りくさったり、愚痴ばかり言ったりしてしまうと、行供養にも、自己犠牲にもなりません。これを筧のような実践といいます。

筧に水を入れるとすべてこぼれてしまうように、人さまのために行なったことが、自分の徳分として蓄積されないからです。

(5) させていただけでありがたい

高い次元で考えれば、人々のために何かをできたことは、実にありがたいことです。

「してやったのだから感謝しろ」「それ相応の礼をしろ」ではなくて「させていただけでありがたい」です。これが、次元の高い生きかたをしている人の精神です。

1.1. 広宣流布

(1) 広宣流布の勧め(庭野日敬著『法華三部経各品のあらましと要点』p. 203)

このようにお釈迦さまは、まずわれわれの心を法華経に開いてくださり、そしていよいよ〈我が滅度の後、後の五百歳の中、閻浮提(えんぶだい)に広宣流布して、断絶して悪魔・魔民・諸天・龍・夜叉・鳩槃荼(くはんだ)等に其の便(たより)を得せしむることなかれ〉と、末法の世こそ、法華経を説き弘めるときであることを、力づくで宣せられるわけであります。

註：我が滅度の後、後の五百歳の中＝釈迦牟尼世尊が亡くなられてから二千年から二千五百年の間のことです。

このころから末法に入ると言われているわけです。

閻浮提＝人間世界のこと。

鳩槃荼＝鬼の一種。人の精気を食らうといわれる。

便＝ここでは、つけ入る手掛かりのこと。

(2) 末法

末法とは、仏法が見失われてしまうことを言います。現代が末法の世であるというのは、仏法を見失った人々が世間に満ちていることを指しています。

仏法を見失っているとは、人間として生きる道を忘れている、無視している、最初から知らないというようなことです。このため、自分本位の身の振る舞い・言葉の振る舞い・心の振る舞いに明け暮れます。仏法を見失っている人々の間には、角突き合い、騙し合い、奪い合いなどの争いが絶えません。

(3) 私たちの使命(庭野日敬著『法華三部経 各品のあらましと要点』p. 203)

〈末法〉、それはまさしく現代であります。この末法に生きるわれわれにこそ、最勝の教えである法華経を〈広宣流布〉する重大な使命があるのです。つまりここで、お釈迦さまから直接われわれに、その使命が与えられたというわけです。

【参考】十諭称歎

経文の現代語訳（庭野日敬著『新釈法華三部経 8』p. 279~293）から、十諭称歎を紹介します。法華経のすばらしさを、十の譬喩で讃嘆しています。

1. たとえば、小川から大河まで、およそ水と名のつくもののなかで、なんといっても海が最大であるように、如来のおおくの教えのなかで、法華経がいちばん深く、いちばん偉大な教えであるからです。
2. また、土山・黒山・小鉄圍山・大鉄圍山から十宝山まで、山と名のつくものはたくさんありますが、そのなかで須弥山が第一であるのとおなじように、この法華経はすべての教えのうち最高であり、かつ中心となるものであります。
3. また、おおくの星のなかで、月がもっとも明るいように、この法華経も、数しれぬ教えのなかでもっとも明るく世を照らすものであります。
4. また、太陽の光のさすところ、すべての暗黒はたちまち消滅するように、この教えも、一切の不善の闇を照破するものであります。
5. また、もろもろの王のなかで、転輪聖王がもっともすぐれているように、この教えは、すべての教えのなかでもっとも尊いものであります。
6. 帝釈天が、三十三天のなかの王であるように、この教えも諸経の中の王であります。
7. また、大梵天王が一切衆生の父であるといいつたえられていますが、この教えも、一切の賢者・聖者・あらゆる段階の修行者・菩薩たちが、仏の境地にたっしたいという心を発したとき、その人々の父として、それらを教えみちびくものであります。
8. また、仏の教えを学んで、程度の差こそあれ心の迷いを除きえた人びとや、みずからの修行によって解脱を得た人びとは、一切の凡夫よりもぬきんてた存在であります。この教えもそれに似たものであります。すなわち、如来の説いた一切の教えや、菩薩の説いた教えや、声聞の説いた教えなどのなかで、もっともぬきんてた、第一のものであります。
したがって、この教えをよく信じ、しっかり心にたもちつづけるものも、おなじように、一切衆生のなかで第一の存在なのであります。
9. また、声聞・縁覚その他一切の仏弟子のなかで、菩薩が第一の境地であるのとおなじように、この経はあらゆる経法のなかで第一のものであります。
10. ほとけはすべての教えの王であるように、この経もすべての経のなかの王であります。

【参考】十二諭の利益

経文の現代語訳（庭野日敬著『新釈法華三部経 8』p. 295~296）から、十二諭の利益を紹介します。

法華経は、この譬喩のような力を持ち、衆生の一切の悩みや病苦を除き、生死という輪廻の束縛から人間を解き放つものであると説かれています。

これらの譬喩を、俗世的な価値観で受け取ると、経文の言わんとしているところから大きく外れる恐れがありますから、注意する必要があります。

1. 清らかな水をたたえた池のところにくれば、のどの渇いた人すべてがその水を飲んで満足するように、この法華経もちょうどそのような力をもつものであります。
2. 寒さに震えていた人が暖かい火を得て生きかえった気持ちになるように、この法華経もちょうどそのような力をもつものであります。
3. 裸の人が着物を得たように、この法華経もちょうどそのような力をもつものであります。
4. 他国へ旅する隊商がよい案内人を得たように、この法華経もちょうどそのような力をもつものであります。
5. 子どもが母に会ったように、この法華経もちょうどそのような力をもつものであります。
6. 渡し場で船をみつけたように、この法華経もちょうどそのような力をもつものであります。
7. 病気のとき医者にきてもらったように、この法華経もちょうどそのような力をもつものであります。
8. 真っ暗な夜に灯火を得たように、この法華経もちょうどそのような力をもつものであります。
9. 貧しいものが宝を得たように、この法華経もちょうどそのような力をもつものであります。
10. 人民がいい統治者を得たように、この法華経もちょうどそのような力をもつものであります。
11. 貿易者が平穏な海路をみつけたように、この法華経もちょうどそのような力をもつものであります。
12. たいまつが闇を照らしたように、この法華経もちょうどそのような力をもつものであります。